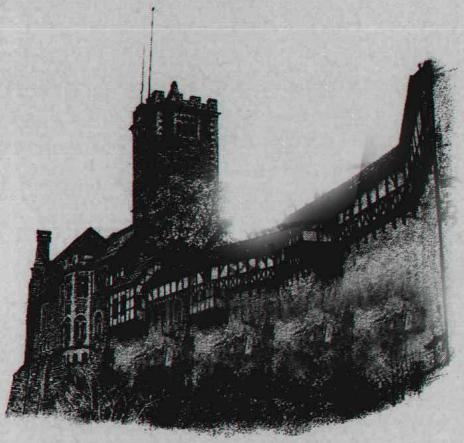
加賀乙彦
母なる大地

母なる大地

加賀乙彦



潮出版社

母なる大地　定価 1400円（本体 1359円）

1989年6月10日　印刷
1989年6月20日　発行

著者　加賀乙彦
発行者　富岡勇吉

〒102　東京都千代田区飯田橋3の1の3
発行所　株式会社　潮出版社
電話（230）0781(編集)　振替東京5-61090
（230）0741(営業)

印刷・明和印刷　付物・栗田印刷　製本・(株)鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします。販売窓口あて御郵送下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。
© O. Kaga, 1989 Printed in Japan
ISBN4-267-01197-4 C0095 P1400E

母なる大地　＊目次

ソ連紀行　＊怒りと響きの戦場

大草原　11
モスクワの美女たち　18
『戦争と平和』の舞台で　24
トルストイの故郷と農婦たち　31
サマルカンドの柔道　37
青年トルストイの故地　44
静かなるドン　54
満月のヤルタ　61
キエフにおける文学論争　67
ペテルブルグ幻想　77

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.cc

『罪と罰』の跡を訪ねる　81
モスクワで飢える　95
ドストエフスキイ肖像画の傑作　103
さらばモスクワ　107

東欧紀行　＊人間の運命

瓦礫より再生したワルシャワ　113
古きよき街、クラコフ　122
ショパンの家　127
リラの僧院　135
吸血鬼ドラキュラの城　143

アドリア海の宝石　151
ドナウ河の落日　159
カフカの迷路の街　166

東ドイツ紀行　＊国境の町

カメラを持つ日本人　181
エルベ河の鷗　193
ワルトブルク城　207
バッハの家　218
アウエルバッハの酒場　235
ベルリンの壁　246

ワイマールふたたび　255
若きゲーテの家　270
あとがき　280

装丁　野田弘志

母なる大地

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.cc

ソ連紀行　＊怒りと響きの戦場

大草原

ソ連に私が旅したのは一九七七年の秋だった。ソ連作家同盟の招待で、小説家の高井有一と文芸評論家の西尾幹二と一緒に文芸家協会の代表というか一員というかそういう資格であった。ソ連ははじめてで、ともかく一度は見たいと思い、文芸家協会に意向をつたえておいたらえらばれたのである。

旅というのはいつもそうだろうけれど、間際まで何かとあわただしい。「新潮」に連載していた『宣告』の書き溜めをやっと終え、九月九日、出航の前の晩、横浜の「ホテル・ニューグランド」に泊りこんだところ朝、女房より電話があり岳父の死を知らされた。時刻が迫っている。どうにも仕方がない。心残りだがトランクを持って大桟橋へ出掛けた。

新潮社の坂本・徳田・前田・鈴木の諸氏、文藝春秋社の箱根氏が送りに来てくれた。高井有一はさすが元新聞記者で要領よく到着しているが、電気通信大学教授西尾幹二がいつまでたっても現れない。

出航手続と通関にほかの客が入って、私と高井だけが残って待っている。仕方がない、西尾だけ置いていくかと覚悟しかかったとき、車つきの大きなトランク（実に大きなトランクなのだ）を押して、小肥りの西尾幹二教授がよろよろとお出ましになった。何でも特別快速が朝無いことを知らず、時間の測定を誤ったのだそうだ。電気通信も役に立たんなとぼやきつつ、大急ぎ、三人

は駆け足で通関、ソ連船バイカル号にやっと乗りこんだ。
船室は一一六号室、進行方向の左側、高井と二人部屋。西尾は一一八号室、細面の青年と一緒だそうだ。
「大きなギターを持ってんだ。断りもなしに下のベッドを占領しやがって、挨拶もしやがらない」
時計を一時間すすめろとアナウンスメントがあった。ナホトカ時刻で船内生活を律すと、すでにしてここはソ連領内であった。船員はもちろん乗客にもロシア人らしいのが多い。もっとも乗船率は低くて三割か四割というところ、船内閑散としている。
昼食にビールを飲んだら眠くなった。昼寝などついぞしたことのない私が眠りこんだ。電話も原稿の締切りも講義(私は当時上智大教授で四駒の講義を持っていた)もないのが快い。目覚めると好奇心が頭に一杯になっており、まずは船内探険に出掛けた。高井をさそったら「面倒くさいよ」と即座に断られた。
ヒッピー風の見るも汚らしいドイツ青年、カメラを胸にぶらさげ横肥りのアメリカ老人、あとはにこりともしない船員たち、どうも話し掛ける気にならぬ。海はどす黒く、鋼の黒さと冷たさでまさしく黒潮だ。うねりが大きく、男波が鋭い。単調な波と風の関係なのに、一度として同じ形の波ができない。見ていて飽きない。台風が去って密雲が裂け、赤い陽が見えた。まるで肉の中に温かく包まれているような淫猥さだ。
夕食。前菜、スパゲッティと鶏の股肉。ブダペストの白にブルガリアの赤をとる。二本で一六〇〇円。高井も西尾も酒豪で、今度の旅は酒びたりの予感がする。食後バーへ行った。金髪の女

の子がウイスキーをがぶ飲みしていたので、三人とも負けじと午前一時まで飲んだ。

九月十一日、日曜日。曇って時々雨が降った。昼頃津軽海峡を通過したが、北海道は霧のさなかで見えなかった。『ロシア語入門』を開いたところ、まるで勉強する意欲おこらず、岩波文庫の『戦争と平和』を最初から読みだした。

寝坊して朝食に出てこなかった西尾が同室の青年のことで腹を立てている。

「床を全部占領して荷物を並べやがった。癪に障るから、机とソファを断乎占領して、ふんぞり返って高井さんの小説を読んでるんだ」

散々愚痴をこぼしたあと、西尾は、ナホトカから原稿を送るんだ、忙しいよと部屋に飛んで帰った。

夕食後バーへ行き、ウォトカを痛飲した。アメリカ人の男女はマメに立っては踊るが、われわれはただただ飲むだけだ。午前二時半まで飲みつづけて三人で二八〇〇円だった。こんなに安くては、安心していくらでも飲める、ソ連とはそういう国だと開眼した。西尾は酔って、日頃の饒舌がダブルになって、日本の文壇における批評家の地位の低さを慨嘆し始めた。私が応じる。高井は、議論となると眠りだし、われわれが沈黙すると、それが刺戟で目を覚した。

九月十二日、月曜日。海の黒が脱けて、明るいウルトラマリンとなり、黒潮をはずれた証拠である。シベリア近し、風寒し、カーディガンをまとって『戦争と平和』を読んだ。ロストフ家の舞踏会やボルコンスキイ公爵の出征など、何度読んでも感心する。こういう小説を一つでも書けたならばと思う。出発直前、漱石を読んでいて、その文体の古さと会話の冗長に唖然としたが、トルストイにはそういう失望がない。

昼頃からインツーリストの女事務員がサロンで乗客に列車の切符を渡し始めた。われわれの場合は招待旅行なので切符はナホトカで渡す、車輛指定券のみだという。なぜそうなのかの説明はなく、第一質問しても答えてくれそうな愛想が全くないのであきらめた。

食堂のボーイ、バーのバーテン、船員たちなど、私にとっては一人一人がソ連人の代表だが、徹底して無愛想だった。国民性なのか。世界のいろいろな国を旅したが、この笑いの欠如はこの船で異様に目立っていた。

午後五時ナホトカ港に入った。日本の木材船を見付けた。軍艦が碇泊している。家々は白壁か黄壁に緑や赤の窓枠で、これから沢山見るロシア風の色彩感覚の走りであった。

上陸してインツーリストへ行くと、モスクワの作家同盟より何の連絡もない、したがってわれわれの切符などないという。高井有一と西尾幹二は、ただちに私を、年齢がすこし上の故をもって、団長にしたてあげ、交渉せよと迫った。ソ連人と人間らしい会話を交す最初がインツーリストの役人（片言の日本語を話す無表情な中年女）であるとは因果なことだが、責任上頑張って、ともかくハバロフスクまでの列車の切符と、モスクワまでの航空券は手に入れた。モスクワの作家同盟に連絡をとってくれと頼むと、電話は電信電話局へ行ってお前たちがかけろ、ただし中々通じないよとおどかされて、あきらめた。

列車に乗りこむと、船でくれた車輛指定券は誤りだと車掌にきめつけられ、二人部屋から四人部屋に移動させられた。重い荷物を引き摺り、食堂へむかう人の流れに逆らって歩くのは骨だった。さて、部屋に入ると夜なのに電灯がつかない。車掌曰く、スピードが落ちているから電圧が下がっておるのだと。しかし隣の車輛も途中の食堂も電灯がついていた。闇の中、荷物の片付け

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.cc